

困難な家庭に思い出を届ける 「ルドルフ基金」実績レポート

チャリティーサンタは「サンタを待っている全
ての子どもに笑顔を届けよう」という趣旨で
2008年に活動を開始しました。2014年
には、届けた子どもが述べ1万人を超えて、初
めての本格的な顧客調査を行いました。そこ
でわかったのは、私達が届けている家庭は「親
子関係がよく、経済的に豊かな家庭が多い」
ということでした。

しかし、家庭環境に課題を抱え、保護者の
都合で「サンタクロースは来ないよ」と子ども
に伝えざるを得ない場合であっても、子ども達
は心のどこかでサンタさんが来てくれることを
他の子どもたちと同じように待っている。

だから私たちは新しいアクションを起こしま
した。

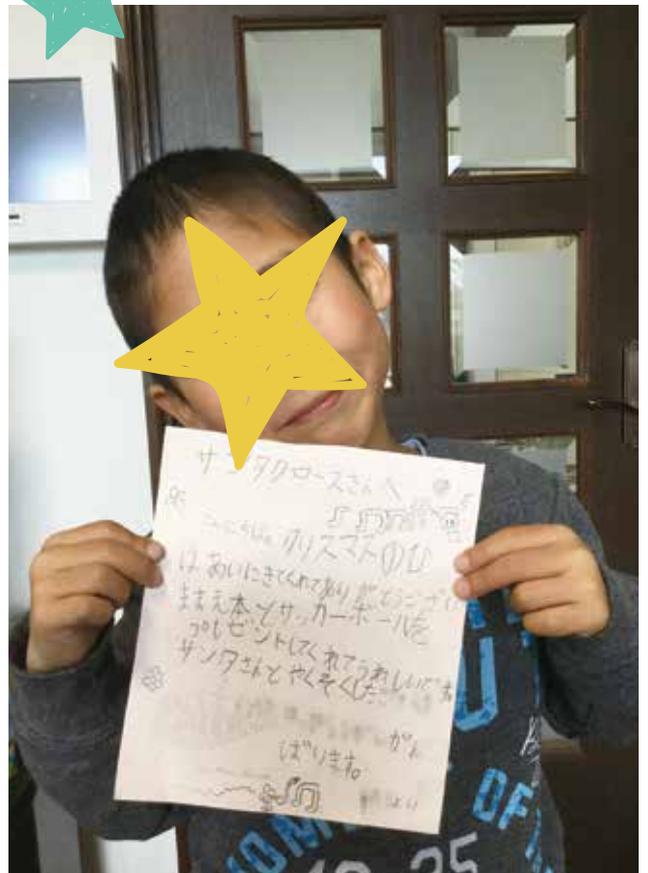
この報告書では、調査結果、基金の仕組み、
連携・協働体制、受益者からの声などを紹
介しています。

NPO法人チャリティーサンタ代表理事…清輔 夏輝^{きよすけ}
ルドルフ基金担当理事…河津 泉

12/24サンタさんの家庭訪問時



後日届いた写真



NPO法人チャリティーサンタ
Charity Santa



WAM 助成
平成29年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉助成事業

貧困層へ家族行事を通じた情操教育支援事業

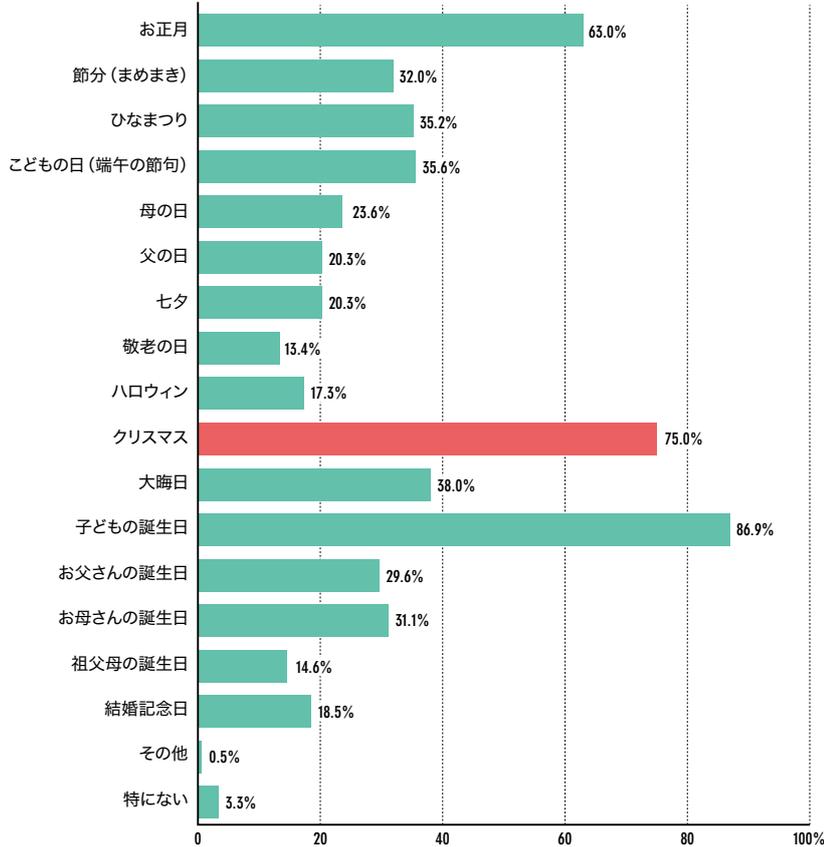
(2017年度)



子育て家庭では「年間行事で最重要」なクリスマス。けれど、「クリスマスを楽しく過ごせない子どもたち」がいる。

チャリティーサンタが実施した調査では家族で大切にしているイベントとして、子どもの誕生日に次いでクリスマスが2番目にあがりました。年間行事の中ではクリスマスが最重要イベントということになります。

親子(家族)のイベントとして大切にしているものはなんですか? 回答数 2062 ※複数回答



▲「サンタ白書 2017」より(3歳~12歳の子どもの持つ親2062人を対象に調査)

しかし調査の中では、一方で「クリスマスに何も準備をしていない(プレゼントを購入、ケーキを準備、ツリーを飾る等)」という家庭が、世帯年収が低い家庭ほどその割合が高くなりました。また何かしら準備をしたくても生活の中で一杯であるという声も多く届いています。

経済的な理由で、クリスマス準備が難しいご家庭から届いた声

母子家庭の状態になって、我が家は、二人で一つのプレゼントです。二人分、それぞれで準備して頂けるのが、ありがたいです

新職場一年未満にてボーナスもでなく、ランドセルもまだ買えてない状態

年末に働いている会社が閉鎖となり、自分自身も出産後ヘルニアとなりなかなか生活、気持ち的にもクリスマスという行事を楽しむゆとりもお金もない

来年、入学ということもあり金銭的にも厳しくクリスマスのプレゼントを用意できないと困っていたところだった

参加しやすい支援の仕組みをつくる必要性

時間的、精神的なゆとりも持てない状況にある家庭は、一般的な家庭行事(誕生日、クリスマス、家族旅行など)の経験が得られず、不要な劣等感や罪悪感を抱え、社会的孤立を深めてしまう恐れがあります。子どもの貧困率が高くなる現在において、行政だけでなく、すべての人が「地域のなかの当事者」として捉え、支えることができれば、子どもたちに希望のある未来をつくることは可能です。

しかし、一般市民誰もが子どもの貧困に対して行動にうつすのは、現在ハードルが高い状態であるため、多くの人が参加しやすく、支えることができる仕組みを構築する必要があります。

そこで、チャリティーサンタでは「クリスマス」という誰もが知っている行事を通し、多くの人が子ども達のために働きかけることのできるプログラムをつくり、波及させることを目指しました。

「当たり前」の思い出がない

経済的不安がある家庭へのヒアリングの中でも、子どもの長期休みにも旅行や自然体験などに連れて行ってあげられないという声が多く、特別な体験に伴う「思い出」が不足しているという意見が最も目立ちました。

実際の生活レベルに 落としてのニーズ調査

子どもがいる現役世帯の相対的貧困率は15・1%であり、そのうち、ひとり親世帯の相対的貧困率が54・6%と、大人が2人以上いる世帯に比べて非常に高い水準となっております^{※1}。
チャリティーサンタでは対象家庭の実際の生活や状況に対しての想いを確認するために、シングルマザーを対象に調査事業を行いました。

※1 『平成27年版 子ども・若者白書』厚生労働省

シングルマザー3人に1人が 「クリスマスなんてこないでほしい」

2017年度の調査では「クリスマスなんてこないでほしいと思ったことがある」という設問に関して「ある」と回答したのは36・9%で、シングルマザーの3人に1人が「思ったことがある」という結果になりました。

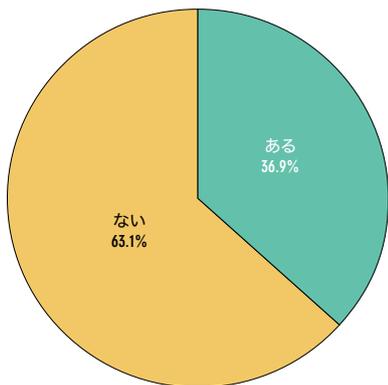
その理由としては「お金がかかる」「時間がかかる（余裕がない）」「母子ふたりで寂しいから」という回答が目立ちました。

クリスマスが家庭の中においての最重要イベントであるのは変わらないのに対し、「子どもを落胆させたくない」という思いから、金銭的な圧迫やプレッシャーを感じている家庭が多いことがわかります。

「他の家庭との比較が怖い」 そんな声も。

実際に2017年度の申し込み家庭には「昨年のクリスマスはプレゼントどころか夜中に半額になったケーキを購入するののためらった」「子どもが他の家庭と比較しないで済むため、冬休みに入っていたことだけが心の救いだった」という声も届いており、その切実さが伝わります。

クリスマスなんてなくてもいい、
来ないでほしいと思ったことがありますか？ 回答数 103



▲「サンタ白書 2017」より（3歳～12歳の子どもの持つシングルマザー 103人を対象に調査）

コラム



改めて考える「貧困問題」の意味

貧困には「絶対的貧困」と「相対的貧困」という2つの概念があります。

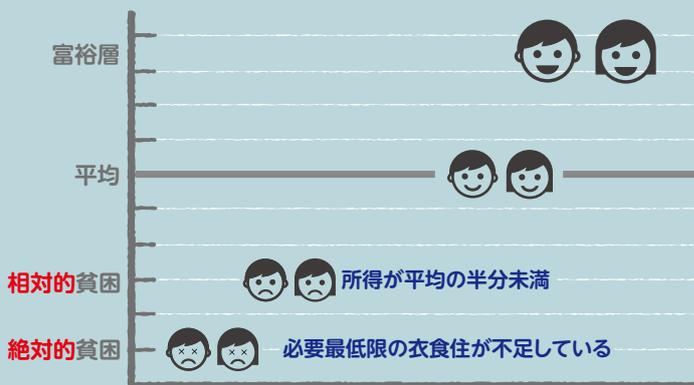
食べ物や住むところがないなど、人間が生きるのに必要最低限の衣食住にアクセスできない層を「絶対的貧困」、それに対してその国・地域の中で普通と呼ばれる生活ができない層を「相対的貧困」と呼びます。



相対的貧困は「見えない貧困」

相対的貧困は全体の「平均」に対して半分以下の所得である状態を指します。日本を含む先進国では、その「平均」のラインが発展途上国などに比べて高いため、仮に平均以下でも、その多くが最低限の衣食住には困らない生活を送ることができます。

しかし「平均」と比較して同じものを手に入れることができない、



同じ経験ができないなどの状態が発生すると、徐々に嫉妬やコンプレックスに悩むようになります。貧困というと、「生きるために必要な最低限のものが不足している」というイメージが一般的に強いいため、相対的貧困の状態が問題であると理解されにくい現実があります。

全国の子どもも達へ！

厳しい環境の中にある子どもたちへの

サンタクロース訪問の実施

「見えない貧困」はすぐ隣で起きていることです。

その課題に対応するため、チャリティーサンタでは厳しい環境にある子ども達へ無償でサンタクロース訪問とプレゼントを提供する取り組みを「ルドルフ基金」として開始しました。(2015年より、通常のサンタクロース訪問による活動で得た寄付金や、広く一般からの寄付などで運営)しかし、これまでのチャリティーサンタでの貧困家庭への訪問は経済的に厳しい子どもたちを支援する施設や病院に過す子ども・被災地など限られた範囲でした。

2017年度「ルドルフ基金(厳しい環境の中にある子どもへのサンタクロース訪問)」実績

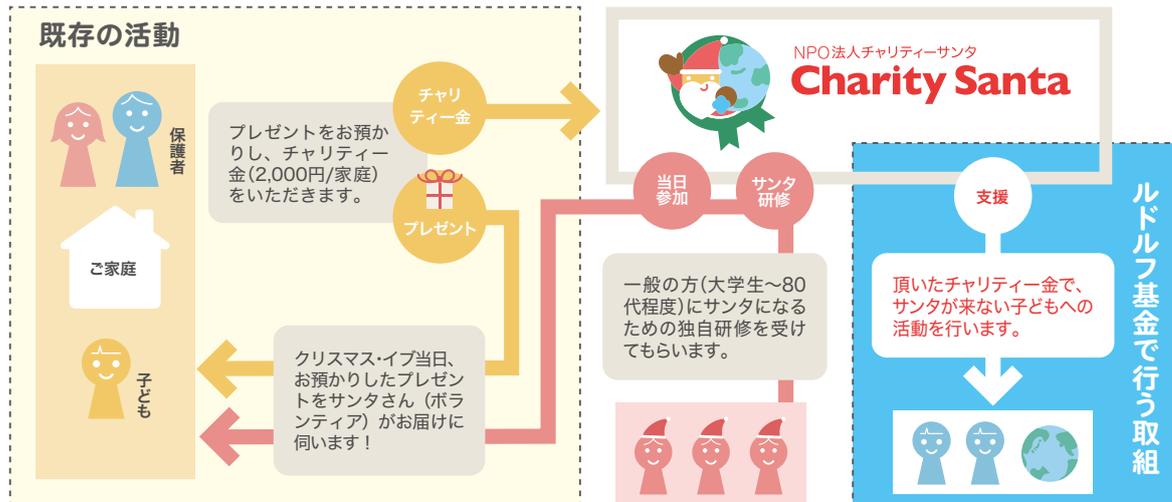
●対象となった子どもの数：492人
訪問家庭数：255

(既存の活動全体数は子どもの数 4851 名、訪問家庭数が 1606 件となっており、全体の約1割が厳しい環境の中にある子ども達となりました。)

●実施地域：10 都道府県

(岩手、東京、山梨、愛知、大阪、岡山、広島、香川、福岡、沖縄)

●対象家庭：支援団体を通じ、シングルマザーで経済的な厳しさを感じている家庭、被災により経済的立て直しを行っている家庭、生活に不安を感じている家庭にアプローチを行いました。



連携団体名(団体の協力を通じて、ご家庭へアプローチしました。)

- ◆NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ(全国)
 - ◆しんぐるまざあず・ふぉーらむ北海道(北海道)
 - ◆NPO法人インクルいわて(岩手県)
 - ◆NPO法人おてらおやつクラブ(愛知県)
 - ◆しんママ大阪応援団(大阪府)
 - ◆岡山県母子寡婦福祉連合会(岡山県)
 - ◆一般社団法人 ほと岡山(岡山県)
 - ◆NPO法人子ども家族生活サポートセンターいとでんわ(岡山県)
 - ◆一般社団法人 ほと岡山(岡山県)
 - ◆岡山県男女共同参画推進センター(岡山県)
 - ◆ひろしま避難者の会 アスチカ(広島県)
 - ◆株式会社サングッド(学生服リユース SHOP さくらや運営)(香川県)
 - ◆NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福岡(福岡県)
 - ◆母子生活支援施設 はばたきホーム(熊本)
 - ◆母子生活支援施設 きらきら星レジデンス(熊本)
 - ◆逢桜の里(熊本)
 - ◆しんママ熊本応援団(熊本)
 - ◆NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・沖縄(沖縄県) 他 敬称略
- 皆様ご協力ありがとうございました。

2017年度は自分たちだけでなく、様々な団体等との連携を行うことで、活動の可能性を上げていきました。

支援団体との連携

チャリティーサンタは「すべての子どもたちを対象」に活動している団体です。

貧困家庭に特化した専門性を持っているわけではないため、実際に困難を抱える家庭を支援されている団体を通じてアプローチを行っています。

また取り組みを強化する中で、対象者への対応の仕方や、ボランティア講習へのアドバイスをもらうことで、現場のノウハウづくりに活かしました。



▲全国各地域のボランティアリーダーが集まり、連携団体からのアドバイスや実際の家庭の声、実施の様子、成果と課題を共有し、次年度の検討を行いました。2018年度はより多くの支部で実施の予定です。



▲実施後、複数の支援団体と役割についての確認や今後の提案についての話し合いを行い、継続的なフォロー準備に繋がりました。



▲NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむの赤石さんと。ご家庭へのアプローチ・調査事業へのアドバイス、実施協力・ボランティアコーディネートの際の注意点・アドバイス協力等

さまざまな連携による
アプローチ&アクション

多くの人が子どもたちのために働きかけられる仕組みを！

〜本屋さん立ち上がった!! 企業との寄付キャンペーンの実施〜

絵本を届けるBook Santa

Book Santa 2017は、「クリスマスに、厳しい環境に置かれている全国の子どもたちに絵本を届けよう」というクリスマス企画です。

NPO法人チャリティーサンタ、日本出版販売㈱、㈱リプロの3社が連携して、クリスマスにできる社会貢献として2017年からスタートしました。

この3社の連携に加え、一般市民が「絵本を寄付（購入）」し、子ども達にプレゼントを届けました。

多くの人へ知ってもらおう工夫も!

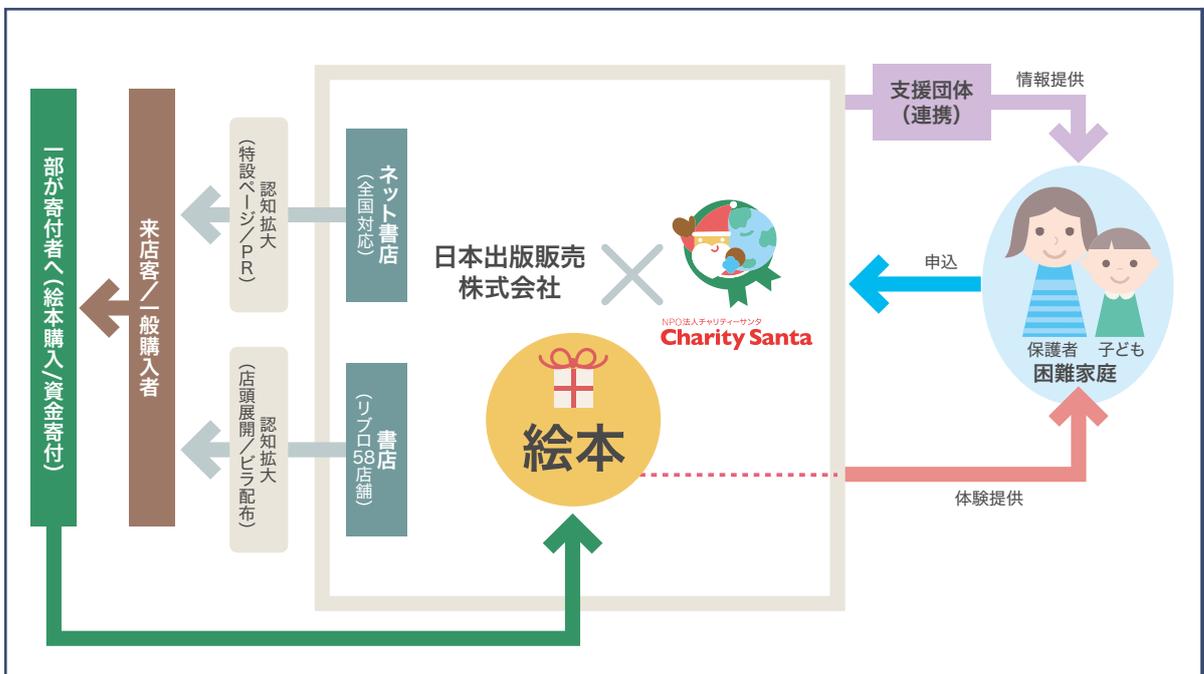
企業との取組で大切に行っているのは企業がつ顧客などステークホルダーへの「認知拡大」です。どんな課題も解決されるには「知られることから始まる」と考えているからです。

Book Santaでは、全国58店舗の書店という多数の人が訪れる場所で行うことができ、認知拡大の意味ではとても意義がある取組となりました。（期間も約2ヶ月あったため数十万〜百数十万人の来店があったと想定）

書店では特設コーナーの展開など様々な露出を行いました（本ページ下部参照）。このように企業の協力を全面に受け、社会課題と支援方法について広く知ってもらう機会を持ちました。

最終的には、書店やオンライン書店などを通じて、84冊の絵本が寄付として集まりました。

実施体制図（2017年度）



▶全国58の書店（リプロ、バルコブックセンター、よむよむ）の店舗にてポスター掲示、POP掲示、持ち帰り用チラシ設置などを行いました（期間11/1〜12/24）また、店舗にて、購入者が商品をいれる袋へ「支援内容が記載されたチラシ」を9万枚を封入し啓発を実施（通常は有料広告だが無料実施）

2017年度に実施した際の対象者からの声を紹介します

事前にいただいた家庭からの声

クリスマスは金銭的に厳しい

「クリスマス時期は高くても連れていってあげられないので、このような機会です。素敵な思い出を作ってあげられたらと思います、応募しました。」

「昨年離婚してから、経済的なことや遠方にひとり3人をなかなか連れていけないなど、子供たちに我慢させることもありました。でも子供たち笑顔で学校も保育園もがんばっています。そんな子供たちに何かとっておきのプレゼントができたらなと思うからです。」

さびしさを感じる

「母子3人で毎年淋しくクリスマスしています。土曜日なのも今年もあり、今から頭を悩ませているため」

「二人だとしても寂しさを感じずには居られず、少しでも子どもの心が温まればと思います。」

仕事で子どもとなかなか過ごせない

「クリスマスは毎年仕事でいないことが多く子どもたちが寂しいのではないかと気にしています」

家族が亡くなつて

「我が家では毎年、家族4人（パパ、ママ、子供達）でクリスマスパーティーをするのが恒例でした。しかし昨年、交通事故で主人を亡くし、まだ幼い子供達にクリスマスを体験してあげられる機会を無くしてしまいました。昨年はパーティーもせずに、寂しいクリスマスでした。」

実施後にいただいた家庭からの声

ク

クリスマスには、お忙しい中、我が家へお越しいただき、誠にありがとうございました。

息子はものすごく驚き、喜んで、サンタさんがいる間は、フリーズしてしまいました。サンタさんとさよならしてすぐ、「サンタさんがそりに乗って飛ぶところをみたい!」といい、2人で三階まで上がって窓から空を見上げました。「見えないな〜!」と言って残念がっていました! さっそく絵本を読みました。今年は、上の子もいないので、2人きりのクリスマスでした。

私にまで贈り物を、本当にありがとうございました。

事前にお願っていたメッセージの効果も絶大で、サンタさんが、どこから見てくれるんだと思って、毎日、いまでも頑張っています。

イ

ヴの昏間に、娘がとても欲しがっていたノンタンの絵本。

しかし、ダメよと言って、ベソをかく娘を引っ張り、その場を後にしました。

その数時間後に現れた、チャリティーサンタさん。

なんと、プレゼントしてくれたのは、ノンタンの絵本でした。

これには私の方がびっくりしてしまい、本当にサンタさんっているのかも…なんて思っていました。年齢に合った素敵なプレゼント、ありがとうございました!!

息

子は大変驚いていました。日頃息子がママを助けていることや、ひらがなやすっじを頑張っていることをサンタさんが知っていて、サンタさんが帰ったら「ママ、サンタさんいつも僕のこと見てくれたんだね。」って言ってました。とっても喜んでいました。翌日保育園では、先生やお友達やお友達のママにサンタさんがきたことを自慢して、サンタさんと撮った写真もみんなに見せていました。一生思い出に残る最高のクリスマススイブになりました。



訪問前のエピソード

「避難生活[※]で、まともなプレゼントを買ってあげられる余裕がないので、子どもには楽しんでい出を、残してあげたいと思ひ、応募させていただけずました。今年は何かに暮らしていただくと、初めて一緒に過ごします。」

※東北震災後、原発などの課題による母子の避難移住。家族との2重生活の中での生活の厳しさがあつた。

訪問後のエピソード



「案の定びっくりしてキョロキョロしてましたが、大変喜んで、いまちようど、冬休みで一番楽しかったことこの宿題の絵日記を描いていました！絵でも驚いてますね（笑）子どもも、夫も一生忘れたいといっています。本当にありがとうございました！サンタさんにもどうぞよろしくお伝えください。」

多数のメディアに掲載！
理解を拡げる

「思い出格差」の現状と支援の必要性。

社会課題が認知されにくい多くの場合は、その状況を想像することが困難だからだと考えられます。クリスマスという誰もとって身近なテーマだからこそ、具体的に想像でき、自分ごととしての共感を得ることができるよう思ひます。

2017年度は多くのメディアに取り上げていただきました。

特に今回、チャリティーサンタで実施した調査内容が、新聞記事化され（シングルマザーの3名に1人が「クリスマスなんてこないでほしい」と思ったことがある等）がニュース番組などに多くに取り上げられたことは、貧困家庭への支援啓発のためのニュース化の成功といえます。

まず多くの人に課題を認知してもらい、行動につなげていく。チャリティーサンタはこれからも社会の中で行動できる当事者を増やしていけるよう、ニュースの発信を続けていきます。

2017年度メディア掲載実績

→メディアへの出演

- テレビ（全国放送）4回
※同じ内容が複数回放送された NHK ニュースについては1回とカウント
- テレビ（地方放送）2回
- 新聞（全国紙・5大紙）6回
- 新聞（地方紙）共同通信の記事を通じて、全国地方紙に多数掲載

→メディア（テレビ）への啓発

独自で調査し、新聞記事化された内容（シングルマザーの3名に1人が「クリスマスなんてこないでほしい」と思ったことがある等）がニュース番組などに自然に取り上げられ、貧困家庭への支援啓発のためのニュース化に成功

※放送された番組数など正確な回数については把握できていないため、上記のテレビ出演回数には本件は含んでいない。



朝日新聞1面 2017年12月21日掲載

これから
広げていく
ために。

明らかになった新たな課題

今回実施をし、必要性についていくつかの課題が見えました。
今後以下の課題を改善しつつ、更なる活動の発展を目指します。

① 困難家庭の保護者に取組を知ってもらうこと

支援団体を通じ、家庭へのアプローチを行いました。既存のインターネットをやる余裕がないくらい慌ただしく生活している（例えば昼夜ダブルワークしているような）保護者へ知ってもらうことが難しい状況でした。

対象者へのアプローチ方法を支援団体とともに準備をすすめるとともに、まだ支援団体に繋がっていない「潜在的な顧客」へのアウトリーチを進めます。

② (DV等のトラウマから)知らない人に家には来てほしくない、という家庭への対応方法

サンタクロースとの思い出（子ども達に特別な経験）を希望はするものの、DVなど過去の事情から「知らない人の訪問」に不安を感じる声も一定数以上寄せられました。

今回は「サンタから手紙が届く活動」をご案内していますが、様々な家庭環境に対応した「思い出支援」を検討していきます。

③ 届けるサンタボランティアを継続的に増やしていくこと

届けて欲しい家庭が増えた時、ネックになるのは「サンタ役のボランティア」です。こちら子ども達へ届けていく上で必須なので、合わせて増やしていくよう冬以外の季節にも働きかけていきます。



私たちにできること

クリスマスは誰もが知っている特別な日です。

「誰もが知っている日」だからこそ、様々な人が関心をもつ・行動できるきっかけとなります。

一般市民のボランティア、企業や資源を持つ団体と連携を通じながら、地域社会と「地域の見えにくいところ」で困っている子どもたち「が」つながっていきける仕組みをつくること「が」これが私たちができることなのではないかと考えています。

地域社会と「地域の見えにくいところ」で困っている子どもたち「が」つながっていきける仕組みを持つ。

これが私たちができることなのではないかと考えています。

どんな環境にいても、すべての子どもたちが笑顔になれる1日めざして。

あなたもサンタクロースになりませんか？

チャリティーサンタ「ルドルフ基金」の取組では、趣旨に賛同する企業・支援団体・ボランティア・寄付者の皆様の参加をお待ちしております。お気軽にご連絡ください。

問い合わせ（「ルドルフ基金」事務局）	rudolph@charity-santa.com	ルドルフ基金の取組みについて	https://rudolph.charity-santa.com
ウェブサイト	https://charity-santa.org	フェイスブックページ	https://www.facebook.com/charity.santa